
スパイス(普通の勇者の物語)

虫松

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイス（普通の勇者の物語）

【Nコード】

N8747Y

【作者名】

虫松

【あらすじ】

魔界のプリンス、ナターシャ スパイは憧れの勇者様に会って、ロマンチックな恋に堕ちる野望を達成させる為、様々な障害を突破する。

第一話 魔界のプリンセス

魔界のプリンセス、ナターシャ スパイは爺や事、大魔導士、ゲラ
ハーゴンより

王女の間で魔法の勉強を講義を受けていた。

「スパイ様、魔法には火、風、土、水の基本がございまして、それ
らは互いに

反発しあっています。例えば通常の魔導士は火の魔法が得意なものは水の魔法は使えません。

また……」

（退屈だわ……勇者様ってどんな人なんだろう、白馬に乗ってる
のかな。

一瞬でモンスターとかなぎ払って、あっという間に、あー会いたい）

「スパイ様、スパイ様！聞いておられるのですか！そんなうつろに
聞いておられては
魔界界のお姫様としては失格ですぞ。我々、上に立つものは下に見
本として……

（つまらない。何この軟禁生活は、早く外の世界に出て、勇者様に
あって、激しい愛に堕ちていつて、
けて結ばれてはいけない禁断の愛！素敵だわ。ロマンチックはあ
ー燃えるような恋！）

ナターシャ スパイは１７歳になる。魔界のプリンセスである。

八重歯が印象的で身長は170cmほど、髪はロングにポニテール、赤いリボンをつけている。黒いドレスに右手には、悪魔の杖という。

一つの目悪魔の武器、

目の下に口がついている。二本の牙ねじり棒めちやくちゃ、おしゃべりである。

「スパイ、爺やの話全く聞いてなかったなあ。」

「飽きちゃった。同じ話ばかり。この魔界は化け物ばかり。ロマンチックの欠片もないわ」

スパイの言っているとおり、魔界には3mほどのミノタウロス（牛と人の化け物）や地獄の番犬、ケルベロス（頭が3つある獰猛な犬） 首のない兵士デュラハーン（片手で斧持った騎士）など地獄形の魔物達がお城を警備していた。

「何か口実をつけて、この城を出てく方法はないかしら」

「そうだなあ。勇者討伐とか、でもお姫様じゃない奴らがいくよな」この魔界において唯一気兼ねなく、本音で話せるのは、悪魔の杖だけだった。

（父（魔王）に直談判するしかないわ。絶対、勇者様に会ったから。会ったから！）

「おいおい、よからぬこと考えてるんじゃないの¥（／／／／）

¥
」

悪魔の杖を握りしめ、スパイは魔王の部屋へ向かうのであった。

第二話 大魔王

「ダメだーああああ。行かせるわけないだろーうが！」

魔王のお城の、王の間 大魔王 ダークドラゴンの声が兎玉した。
大魔王、ダークドラゴンは体長は10mはあろうかという。
大きな体格、太っている、デブであるゆえに空を飛ぶ事はできない。

「でも、でも、外の世界も見たいし、ついでに勇者も倒しちゃう
みたいな。いいじゃん！このデブ親父！」

「何と、この大魔王に向かって口の聴き方！娘で、なければ火炎ブ
レスで

焼き焦がしてくれるわ」

「やれるもんなら、やってみせなさいよ、」

（ちょっと、それはまずいんじゃないの）
悪魔の杖は冷や汗をかいた。

「ミノタウロス、スパイを部屋に連れ戻せ！」

両脇にいた。2体の魔王のミノタウロスはスパイ姫を捕まえようと
右腕と左腕を伸ばした。その瞬間

スパイはミノタウロス肘の関節をひねり1体を転ばせると2体目を
悪魔の杖で頭を跳ね上げた。

「スパイをみんなでとり押さえる！」
沢山のミノタウロスが扉から出てきて

スパイは両脇にミノタウロスに抱えられ中を浮いた。

「死ね、クソ親父！」

ミノタウロスと一緒にスパイは王女の間に関連された。

（こんなに、おてんば姫にそだつとは・・・）

大魔王、ダークドラゴンは誰もいなくなった王室で一人ため息をついた。

第三話 格闘訓練所

スパイは格闘訓練所へ向かった。

むしろくしゃするので暴れてすつきりする為であるが。

スパイの強さは折り紙付きであったので、誰も相手をしたくなかった。

「オーガーさつさと前に出てこんかい！」

オーガー、巨大な力もち日本の鬼に当たる魔物。

「スパイ姫、今日はもうこのへんで」

「何だと。まだ始まったばかりだろうが！」

あたりを見回すと、沢山の魔物が倒れ、治療室へ搬送されていた。骸骨兵士は粉々に砕け散っていた。

「そっちが、来ないというなら。ダークネスファイヤー」【火の属性】

悪魔の杖を天高く掲げると、空から沢山の炎の塊が降り注いだ！

「ぎゃああああー」

「火事だ、急げ消化部隊！」

燃え上がり、熱くて暴れ回るオーガーに水龍の放水が始まった。

「スパイやり過ぎじゃない」

「こんなもんじゃ、私の怒りは収まらないわ」

「スパイ姫さまー。何をしてらっしゃるのですか？魔法の勉強の講義はとつくに始まってますぞ！」

大魔導士、ゲラハーゴンが格闘訓練所に現れた。

「爺や。お前が私の相手をしてくれるのか！」

「えー。スパイ、大魔導士はマズイよ。」

「ほほほっほー、スパイ姫様の退屈しのぎに付き合いますかな」

大魔導士、ゲラハーゴンは大悪魔の杖を両手に持った。

ゲラハーゴンは頭が脳みそで3分の2覆われている。

白ヒゲと身長は150cmと小柄なおじいさん。

「ダークネスファイヤー！」

スパイは先ほどと同じように悪魔の杖を天高く掲げると空から沢山の炎の塊が降りそそいだ。

「アイス ストーム」【水と風の属性】

ゲラハーゴンは両手に持った、大悪魔の杖から冷気の風がふき、炎の塊を固め。吹き飛ばした。

「実践、授業の始まりですな」

「アースクエイク！」【地の属性】

スパイは悪魔の杖を地面指すと地面が割れ、ゲラハーゴンに向かって亀裂が走り。地面が割れた。

「ほっほほほ！ マグマ ハリケーン」 【火と風の属性】

ゲラハーゴンは宙に飛びスパイの足元が割れ地下からマグマが吹き出した。

同時にハリケーンが襲ってくる。

「スパイ、もうダメだ、降参しよ。大魔導士は水風土火全てを操れるスペシャリストとても魔法じゃかなわないよ」

「ならば、格闘で脳みそぶっ叩くのみ！

スパイは悪魔の杖を両手で握りしめた。

第四話 家出

「ファイヤーフレイム！」【火の属性】

スパイは周りに囲っていたマグマをスパイは悪魔の杖を横に振りスイング
炎の壁を作り突破した。

「ハリケーン来たよ！どうするの？」

「アースウォール」【地の属性】

悪魔の杖を地面に刺しながら横に走りながら
線を引くと、

ハリケーンの前に土の壁が吹き出した。

ハリケーンは土の壁と激しく衝突した。

（後、30mで爺の頭を殴れるわ）

スパイは爺や目がけて真っ直ぐに走り出した。

「ほっほほ。流石、スパイ姫様よくぞ突破されましたな。」

（後、20m）

「でも、まだまだ教えてない事もあるのですぞ」

（後、10m）

「バブルスリープ」（睡眠させるシャボン玉）【水と魔の属性】

爺や事、ゲラハーゴンの大悪魔の杖に口から泡が無数に飛び出し
スパイ姫に向かって排出された。

（後3m・・・）

スパイは悪魔の杖を振りかぶった状態で目がウツロとなり。後ろへ
倒れた。

「ぐがあああ、ぐがあああ！」

「大魔王ダークドラゴン様に劣らないイビキ・・・ほっほほほ」

スパイ姫はベットに寝かされていた。
時計を見ると23時を差している。

（くそお、もう一步だったのに。）

「スパイ起きたのかい。ゲラハーゴンに戦いを挑むなんて。むちゃ
くちゃだなあ」

「こんな生き地獄みたいな生活、もう我慢できない」

「まさか家出する気じゃないよね。僕は嫌だよってあーあ」

悪魔の杖を片手に飛竜にまたがったスパイは勇者の元へ飛んでいく
のだった。

第五話 ファイアンセ

「何！スパイが飛竜に乗って家出しただと！」

「はい、見張りのものが確認しました。」

魔王ダークドラゴンと大魔導士ゲラハーゴンは王の間で部下の報告を聞いていた。

「どういたしますか魔王様、姫は無理矢理連れ戻せば、多くの犠牲がでます。」

「もつと、おしとやかに育てれば良かった」
魔王は頭を抱えた。

「この魔界で生きていく為には、おしとやかには育てる環境ではありません。」
何せ地獄の番犬やら首なし兵士、巨大なミノタウロス、死の世界。花も緑もないのですから。」

「育て方はともかく、連れ戻さないと。面倒なことになる前に」

「ファイアンセのベルゼブブ（ハエの王）に迎えに行かせましょう。」

（あいつ人間の姿の時はかつこいいんだけどな。魔人化するとデカイハエになるんだよな）

「まあ実力的にはスパイに勝るにも劣らないな」

（ただ、かなりスパイには嫌われていたような）

「フィアンセの説得ならスパイ姫も納得するでしょう。おい、早くベルゼブブを呼んで来い！」

兵士は数分後、ベルゼブブを王の間に呼んできた。

「愛しのスパイ姫、必ずや連れ戻してみせます。」

ベルゼブブは魔王と大魔導士の前に右腕を前に出し貴族風の挨拶をした。

ベルゼブブは擬人化していた。背丈は190cm。痩せ型、気高い紳士のような

格好をしていて、中々の美男子である。

白い肌、綺麗な目。普通に街を歩いていたらかッコイいと女性群から注目を集めるだろう。

「うむ任せたぞ、ベルゼブブ。姫は気性が荒い。手荒な真似はするな。」

「お任せあれ！そつれ」

ベルゼブブはデカイハエとなって、飛んで行った。

第六話 勇者はどこ？！

「でもさあ、勇者って何処にいるのー？」

飛竜に背中に乗ったスパイと右手に握られた悪魔の杖は問いかけた。夜空の月に向かって飛竜は飛んでいる。

飛竜は体長、3mほど、自動車くらいの大きさである。

「何処にいるって、考えなく出ってたから知らないわよ」

（あーあーお腹が空いたとかいって帰ってくれないかな、今まで姫様級の

いい暮らししてたんだぜ。いきなり平民の暮らしとか無理でしょう）

悪魔の杖は目を細めてスパイを見た。

「何よ、そのー目は？どつかのお城とかに行つて、王様とかに挨拶してる

はずよ。そんなもんじゃない。ロールプレイングの勇者って」

「そ・・・そうだよな。早くお城に行こうか。」

（はあー長くならなきゃいいけど。）

「まずは冒険者が最初に訪れる、アルベルト城へ！」

スパイの飛竜は東へ進路を変えた。

その後ろにベルゼブブのハエが追いかけていた。

（スパイ可愛いよスパイ。逃げてでも逃げてでも追いかけて見せるよ君の匂い体臭は決して消すことはできない。僕の嗅覚はハエのように以上に発達しているのさ）

その頃、勇者は、アルベルトの城で王様に冒険の旅立ちの報告をすませ。

次の町。カザフの町の宿屋に宿泊していた。ベットに横たわり横の窓から

星空を見る勇者。今日は月が満月、何か得した気分になる。

（これから、1人旅は辛いよな。そうだなあ僧侶は必要だよな。戦士も欲しいよな。

魔法使いも全体攻撃できるし。武闘家も素早く攻撃できるよなあ）

とか考えながら眠りについていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8747y/>

スパイス(普通の勇者の物語)

2011年11月26日22時57分発行